MUSASHINO for TOMORROW Vol.128

巻　頭

ベルリオーズ 没後150年に寄せて

稲田隆之（武蔵野音楽大学准教授）

海外音楽事情

音楽と向き合う姿勢

イリーナ・チュコフスカヤ（ピアニスト）

表紙：江古田キャンパス　メインロビー

January 2019
vol.128

謹賀新年

学校法人　武蔵野音楽学園　理事長　**福井直敬**

皆様にはご健勝にて佳き初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昭和4(1929)年、武蔵野音楽学校として開設した本学園は、多くの曲折を経て本年創立90周年の記念すべき年を迎えることができました。偶然とは言え、今上天皇のご退位と新天皇のご即位に伴い改元が行われる記念すべき年に、本学園が次の100周年に向かって、また新たな歩みを進めることは大変感慨深いものがあります。

さて早いもので一昨年4月、東京の江古田ならびに埼玉の入間と、二つのキャンパスに分散して行っていた武蔵野音楽大学の教育研究活動を交通至便な江古田キャンパスへ集約し、すでに2年近くが経過しました。しかし、キャンパス内の全施設が刷新され機能的に工夫が凝らされた施設であっても、人が新しい環境に馴染むためには一定の時間が必要となるようで、今年度に入ってから学生生活の雰囲気もすっかり落ち着いてまいりました。

音楽の単科大学であるにもかかわらず、図書館の利用者が年間従来の2倍以上の延べ10万人を超えるまでに急増したことでも窺えるように、総じて学修意欲の向上とその成果が見受けられ嬉しく思っております。また、昨年末には本学ウィンドアンサンブルがシカゴのミッドウェスト・クリニックに出演し、J.A.ジルー「≪タブー≫～独奏トランペットとウィンドアンサンブルのための～」(独奏ニューヨーク・フィルハーモニック首席C.マーティン)、K.M.ヴァルチック「プロトン」、P.ミーチャン「岸辺に打ち寄せる波」と、それぞれ著名な作曲家の新作初演を含むプログラムで大成功を収めました。

新キャンパスが完成し懸案であった耐震化とバリアフリー化もほぼ完了した今、今後本学園は、総力を挙げて教育研究の質向上と経営力の強化に注力していかなければなりません。新年度は、キャンパスの集約と同時に行った学科の統合・再編による新カリキュラムの完成年度に向けて、教育課程のさらなる見直しを行い教育機能の充実を図ることが喫緊の課題ではありますが、内部質保証、学校法人のガバナンス改革、教職課程の再課程認定への対応、情報公開など、近年枚挙にいとまがない教育関連の諸課題にも着実に取組んでまいる所存です。

新しい年も皆様のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

▲ 1863年のベルリオーズ

ベルリオーズ没後150年に寄せて

稲田隆之
武蔵野音楽大学准教授
（音楽学）

稲田隆之 *Takayuki Inada*

長野県松本市出身。博士（音楽学）。専門は西洋音楽史、特に楽曲分析による作曲家・作品研究。具体的には、19世紀のオペラ、交響曲、歌曲における作曲技法、音楽と言葉の関係、詩的なもの、各ジャンルの交差を研究中。著書：『ワーグナー事典』（共著、2002年、東京書籍）、『R.ヴァーグナーの《ニーベルングの指環》研究―「ライトモティーフ」技法の様式的変遷』（2006年、コンテンツワークス、東京藝術大学博士論文）、『ヴァーグナーの舞台作品におけるドラマ性』（編著、2014年、日本独文学会叢書）。論文・楽曲解説多数。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。文教大学、洗足学園音楽大学、立教大学、東京藝術大学、くらしき作陽大学、武蔵野音楽大学、明治学院大学の各非常勤講師および兼任講師を歴任。香川大学講師、同准教授、武蔵野音楽大学講師を経て現職。日本音楽学会、美学会、日本ポピュラー音楽学会、日本ワーグナー協会の各会員。

今年2019年は、フランスの大作曲家エクトル・ベルリオーズ（1803-1869）の没後150年に当たる。そのベルリオーズの代名詞ともいえる《幻想交響曲》は、西洋音楽史における重要作品のひとつであるだけでなく、今もなお、オーケストラの主要なレパートリーとして世界中で親しまれている。

しかし、《幻想交響曲》以外の作品となると、知名度は一気に下がり、演奏される機会も激減してしまう。実際にベルリオーズの作品は生前から、「不統一でまとまりがない」と評されることが多く、成功作と失敗作の差も激しい。今もなお評価の難しい作曲家のひとりだが、果たして彼の音楽の魅力とは何だろうか。

まずは、彼の出世作となった《幻想交響曲》の謎解きから始めよう。

《幻想交響曲》の戦略

ヴィーン古典派の均整のとれた音楽のかたちは、19世紀に入ると、徐々にロマン主義への動きをみせていく。その中心にいた作曲家こそ、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770-1827）にほかならない。そのベートーヴェンがヴィーンで亡くなったのは1827年である。そのわずか3年後の1830年に、ベルリオーズが画期的な《幻想交響曲》を発表した。両者の音楽の違いには驚愕せざるを得ないが、だからといって、ベルリオーズの音楽を音楽史における異形として簡単に片づけるわけにはいかない。

まず《幻想交響曲》は、ベルリオーズの自伝的作品として知られる。1827年9月11日、当時23歳だったベルリオーズは、イギリスのシェイクスピア劇団の看板女優ハリエット・スミッソンによるパリ公演を見て、彼女に一目惚れした。積極的に接触を試みたものの失敗し、彼女に失恋したことが作曲のインスピレーションに繋がったという。

しかし、よく考えてみれば分かるように、無名の若手作曲家に看板女優が振り向くと考える方が不自然だ。ベルリオーズがスミッソンの演技に感銘を受けたことは確かだろうが、彼女への失恋が《幻想交響曲》の創作に直接インスピレーションを与えたことについては、現在疑問符が付けられている。むしろ、有名女優スミッソンに言及することで、《幻想交響曲》

▲ オフィーリアを演じるスミッソン

の公演に関心を集めようという戦略があったと考えられる。

その《幻想交響曲》が初演される前の1830年初夏、ベルリオーズはカンタータ作曲の課題により、栄誉あるローマ賞の作曲部門で1等賞を獲得した。彼がのちに書いた『回想録』によれば、《幻想交響曲》の初演は、ローマ賞受賞者の特典であるイタリア旅行前に、自主企画されたものだった。ベルリオーズ本人には、特典のイタリア旅行を回避して、引き続きパリで活動したいという思惑もあり、《幻想交響曲》の初演を失敗するわけにはいかなかった。同じく『回想録』には「アブネックがこの演奏会の指揮を引き受けてくれた」(丹治恒次郎訳)とあっさり書いているが、当時ベートーヴェンの交響曲を積極的にパリに紹介して注目を集めていたベテラン指揮者のアブネック(1781-1849)に指揮を引き受けさせたことにも、ベルリオーズの戦略があったに違いない。

おかげで、同年12月にパリ音楽院で行われた《幻想交響曲》の初演はセンセーションを巻き起こし、ベルリオーズの名も一躍知られるようになった。それどころか、1832年の《幻想交響曲》とその続編《レリオ》との組み合わせによる再演時には、スミッソンの関心を引き、二人は結婚することになる。

戦略としての「固定楽想(イデー・フィクス)」

周知のように、《幻想交響曲》は全5楽章からなり、各楽章にはベルリオーズによってかなり具体的な標題が与えられている。それらをまとめるならば、全曲は「若い芸術家が失恋し、アヘン(麻薬)を飲んで自殺を図ったが、致死量に達しなかったために死に至らず、奇怪な夢を見る」という内容をもつ。

しかしながら、音楽の内容を冷静に分析する限りでは、この《幻想交響曲》は「不統一でまとまりがない」と評価されてもおかしくない。そこで5楽章全体を統一的にまとめあげているのが、恋人の幻影を表す「固定楽想(イデー・フィクス)」というわけだ。「固定楽想」が全5楽章に表情を変えながら現れる手法こそ、その後の作曲家たちに多大な影響を与え、音楽史における重大な功績と記されることになる。

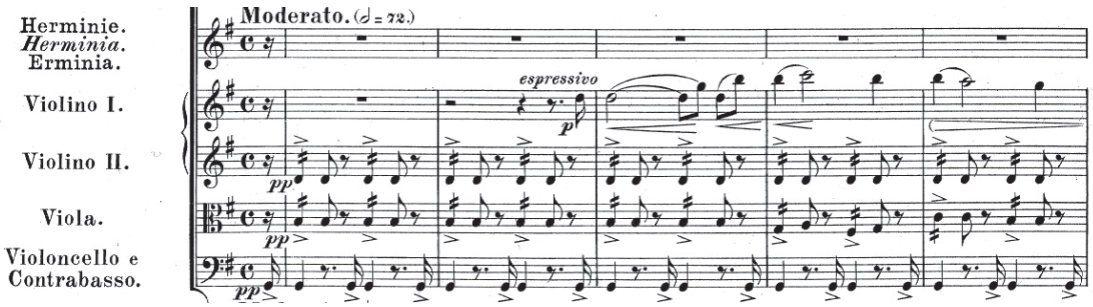
ところが、この「固定楽想」はそもそも《幻想交響曲》のために作曲された旋律ではない。上記のようにベルリオーズは1830年にローマ賞で1等賞を獲得するわけだが、このときすでに4度目の応募だった。実は2度目の応募の際に作曲したカンタータ《エルミニー》で用いた旋律を、固定楽想として《幻想交響曲》に転用したにすぎない。第4楽章〈断頭台への行進曲〉もまた、未完のオペラ《宗教裁判官》における行進曲を転用したものである。ただし曲の結尾に、ギロチンが主人公の首を打ち落とす、という有名な場面を付け足した。

不統一でまとまりのない極めつけは第5楽章だろう。グレゴリオ聖歌の「怒りの日」が挿入され、化け物たちの奇怪な笑い声が耳を突く。弦楽器の特殊奏法あり、魔女たちのフーガありと、音楽の饗宴や狂瀾が繰り広げられる。

つまるところ、こうした「不統一性とまとまりのなさ」に統一感を与えているものこそ「固定楽想」であり、この「固定楽想」の説得力を担保しているのが、ベルリオーズによる標題なのである。この標題と固定楽想が、自身の過去の作品を再生させる戦略とつながっている。だからこそ、この標題には推敲に推敲を重ねたのだった。

▲ 1832年のベルリオーズ

▲ 指揮者アブネック



▲ 楽譜はカンタータ《エルミニー》の冒頭。第1ヴァイオリンの旋律は《幻想交響曲》の固定楽想そのもの

シェイクスピアとベートーヴェン

こうして《幻想交響曲》は極めて独自の作品として生み出された。しかし、そこにはベルリオーズならではの必然性があった。それが、シェイクスピアの戯曲とベートーヴェンの交響曲の融合、である。

そもそもフランスでは、コルネイユやラシーヌの古典劇に代表される演劇文化とそれと密接につながっている詩芸術の文化が培われていた。やがて19世紀に入ると、ユゴー、バルザック、デュマといった文豪の長編小説が大量に生み出されていく。そういったフランス特有の演劇性、ドラマ性、物語性に、ロマン主義的な新しい意味を加えたのが、イギリスの戯曲家シェイクスピア(1564-1616)の再評価だった。シェイクスピア人気がさらにフランスの演劇文化を高め、ベルリオーズもまたシェイクスピアが生んだドラマに影響を受けたのだった。

同じ時期に、アブネックがパリ音楽院のオーケストラで積極的にベートーヴェンの交響曲を取り上げていたことで、ベートーヴェンの音楽にも衝撃を受ける。オーケストラの表現力と演劇性、ドラマ性、物語性を融合させるという発想は、ベルリオーズにとって当然の帰結だったのだろう。

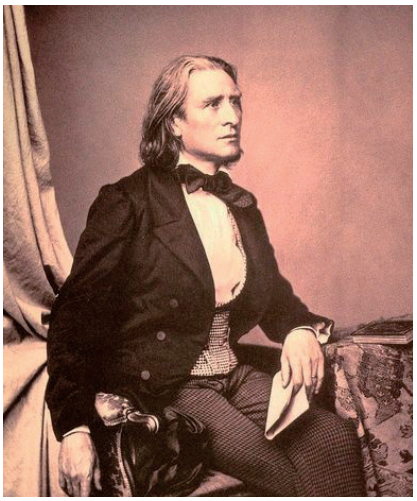
《幻想交響曲》以降の作品を見渡してみても、《幻想交響曲》の続編で台詞による独白劇《レリオ》(1832)、バイロンの長編詩とヴィオラ協奏曲が結び付いた交響曲《イタリアのハロルド》(1834)、多種多様な音楽様式を詰め込んだ巨大な編成による《レクイエム》(1837)、シェイクスピアに基づきながら主役二人が直接登場しない劇的交響曲《ロメオとジュリエット》(1839)、オペラのようでオペラではない劇的物語《ファウストの劫罰》(1846)等々、既存のジャンルには分類できないものばかりである。

ベルリオーズ――リスト――ワーグナー

ベルリオーズの音楽は、ドイツ側の作曲家たちにも衝撃を与えた。《幻想交響曲》の初演をきっかけに出会ったのが、フランツ・リスト(1811-1886)である。その後も二人は親密な関係を重ね、リストは1833年のベルリオーズとハリエット・スミッソンの結婚式に出席している。翌1834年にリストは《幻想交響曲》をピアノ用に編曲して出版し、作品の普及に大きく貢献した。

また、1852年にはヴァイマル宮廷楽長だったリストが、ベルリオーズのオペラ《ベンヴェヌート・チェリーニ》を再演。1855年にベルリオーズが当地を訪れた際には、リスト独奏、ベルリオーズ指揮によって、リストの《ピアノ協奏曲第1番》を初演している。そして、オーケストラの表現力と標題を結び合わせるというベルリオーズのアイディアは、リストの「交響詩」に多大な影響を与えたことだろう。

一方でベルリオーズと微妙な関係にあったのが、リヒャルト・ワーグナー(1813-1883)だった。ワーグナーの自伝『わが生涯』によれば、ワーグナーはパリで成功の糸口を探りなが



▲ 1858年のリスト

▲ 1861年のワーグナー

ら極貧生活を送っていた時期に、いくつかのベルリオーズ作品に出会っている。それが《ロメオとジュリエット》、《幻想交響曲》、《イタリアのハロルド》、《葬送と勝利の大交響曲》だった。自伝には、それらの音楽に対する感銘と戸惑い、嫉妬心が綴られている。

その後ワーグナーは1848/49年の革命を経て、四部作の楽劇《ニーベルングの指環》の構想に向かう。《指環》の理論的著作『オペラとドラマ』(1851)では、創作の理念としてシェイクスピアの戯曲とベートーヴェンの交響曲の融合を掲げた。

また、ワーグナーは1853年10月7日、9日、10日に、パリで《指環》の台本の朗読会を行う。その最終日にリストとベルリオーズが顔を揃え、三人の間には微妙な空気が流れた。一方1858年にベルリオーズがオペラ《トロイアの人々》の台本を朗読した際には、ワーグナーが顔を出している。いうまでもなく、ワーグナーの《指環》とベルリオーズの《トロイアの人々》は、19世紀ロマン主義が生んだオペラの巨大絵巻の双璧である。お互いが相手に対して共感と反発、賞賛と嫉妬というアンビヴァレントな感情を抱く。

そしてついに、ベルリオーズ、リスト、ワーグナーが保っていたぎりぎりの緊張関係が破綻した。1860年にワーグナーが出版されたばかりの《トリスタンとイゾルデ》のスコアをベルリオーズに贈り、同年、パリではワーグナー作品ばかりの演奏会が3回開かれる。やがて若い芸術家たちの間でワグネリズムが過熱するなか、ベルリオーズがワーグナーを批判し、ワーグナーも反論した。二人の悪化した関係はリストにも及んだ。

ベルリオーズの再評価に向けて

三人の関係が決裂したことは、その後のベルリオーズ評価に少なからず影響を及ぼした。折しも、『音楽新報』の編集長を務めていた音楽批評家フランツ・ブレンデル(1811-1868)が、「ベルリオーズ、リスト、ワーグナー」をまとめて「新ドイツ派」と提唱したのは1859年である。まもなくそこからベルリオーズが外されるのは当然の結果だった。新旧音楽の美学論争はドイツ中心に展開され、ドイツのナショナリズムと切り離せない関係となる。ドイツ中心の音楽史観が堅固になるほど、ベルリオーズを評価するものさしが失われていく。

ベルリオーズの作品の、ある意味「不統一でまとまりがない」という特徴は、ピアノにこだわり続けたフレデリック・ショパン(1810-49)の裏返しとみてとれるだろう。ショパンがピアノにしかできない表現を求め、彼独自のピアニスティックな響きを生んだのとは反対に、ピアノが苦手だったベルリオーズは、オーケストラにしかできない表現を希求し、オーケストラの響きが活きる標題やドラマ性を必要とした。だからこそ、ベルリオーズの音楽を理解するためには、まず彼がこだわった標題やテクストとじっくり向き合う必要がある。

作曲家の記念年は、普段縁のない音楽に出会う絶好の機会でもある。これを機に、ベルリオーズ独特の音楽の世界に浸ってみたい。

音楽の万華鏡 44

大阪万博

2025年の万博は、大阪で開催されることが決まりました。万博では、音楽は何を聴きたい(見たい)？ 何を聴いてほしい(見てほしい)？ と聞くと、指名が集中する舞台が浮かび上がってくるでしょうか。

1970年に大阪で開催された日本で初となる万博では、音楽に関しては「日本人作曲家による前衛音楽」に絞り込まれた企画であったと思われます。イヴェント、ハプニング、ミクスト・メディア等の語が、1970年前後の音楽の動向を指す語として使われていました。イヴェントは、参加者は、動きや出来事を自由に選択し、聴衆は、行ってみないと何が起こるのかわからない、という、コンサートに代わる音楽のあり方を指しています。出来事、事件を語義とするハプニングはイヴェントに重なる点もありますが、ハプニングは、その地としての生活と繋がりながらも、生活の諸要素は幻想的で風変わりなものになっている、と定義する作曲家もいます。ミクスト・メディアは、たとえば楽器の音と電子音という発音方法の異なるメディアを同時に使って、多様な関係を引き出すことを目的とするジャンルです。

これらの欧米の作曲界の動向に日本の作曲家たちも関心を持ち、それらをモデルに各自で作品を書いていました。欧米の同時代の音楽は日本では少し遅れて実践されるというのは以前のことであって、今はほとんど同時期に欧米と日本の作曲界が最新の動向を共有していることを伝えたかったのだと思われます。

1970年前後には、武満徹《ノヴェンバー・ステップス――琵琶、尺八、オーケストラのための》(1967)に象徴されるように、日本の伝統音楽や伝統楽器を前衛的な諸手法で扱う、現代邦楽と呼ばれる作品も書かれていましたが、欧米の前衛音楽に与する作品に比べると、万博の会場で展示される例は少なかったように思われます。1970年の大阪万博では、日本あるいは伝統の語は、非近代化と結びつけられるのではないか、という懸念があったのでしょうか。2025年の大阪万博では、欧米の作曲家にはない、日本の作曲家に特有である、と聴く者を唸らせる文化と様式を備えた音楽を聴きたいと思います。

楢崎洋子(本学音楽学教授)

海・外・音・楽・事・情

音楽と向き合う姿勢

●イリーナ・チュコフスカヤ（ピアニスト）●

わずか7歳でオーケストラと共演するなど、幼い頃からその豊かな才能が認められていたピアニストのイリーナ・チュコフスカヤ先生。第10回ショパン国際ピアノコンクール第6位入賞、世界各国でのリサイタルや様々なオーケストラとの共演を経て、現在はグネーシン音楽大学の教授を務めるなど教育者としての実績も豊富です。本学の客員教授就任のために初来日した先生に、ご自身の音楽キャリア、現在のロシアの音楽事情などについて、お話をうかがいました。（2018年10月26日インタビュー）

イリーナ・チュコフスカヤ
Irina Chukovskaya

ロシアのピアニスト。6歳よりタマラ・ポポヴィッチの指導を受け、その後モスクワ音楽院付属中央音楽学校、モスクワ音楽院でヴェラ・ゴルノスタエヴァ、スタニスラフ・ネイガウスに、同大学院で、ドミトリー・バシキーロフに師事した。さらに米国でテオドール・レヴィンの指導を受ける。7歳の時にウズベキスタンのタシケント・フィルと協演し、13歳で初のリサイタルを行った。1980年開催第10回ショパン国際ピアノコンクール第6位入賞をはじめ、国際コンクールの入賞歴多数。世界各国で、オーケストラとの共演やソロリサイタル、室内楽を多数開催、CDのリリースなど活発な演奏活動を行う。レパートリーは古典から近現代と幅広く、その中には40曲にもおよぶピアノ協奏曲が含まれている。1999年よりモスクワ音楽院でレフ・ナウモフの助手として教え始め、現在はグネーシン音楽大学教授。本学の客員教授として初来日。

思い出深い ショパン国際ピアノコンクール

── まず、先生の音楽キャリアをお聞かせください。

チュコフスカヤ　7歳のとき以来、毎年オーケストラと共演し続けられたことは、とても幸運だったと思っています。これはすべてタシケント（ウズベキスタン）出身の、タマラ・ポポヴィッチ先生のおかげです。彼女は私の最初の先生で、音楽と自らの学生に対して献身的な素晴らしい女性でした。またモスクワの中央音楽学校の学生だった時、初めてのソロリサイタルも経験しました。母に会いにフェルガナ（ウズベキスタン）を訪れた際、彼女がヴァイオリンの教授として働いていた音楽大学でリサイタルを行ったのです。

1980年に出場した第10回ショパン国際ピアノコンクールについては、素晴らしい思い出があります。マルタ・アルゲリッチやパウル・バドゥラ＝スコダ、ハリーナ・チェルニー＝ステファンスカ、ニキタ・マガロフといった素晴らしい音楽家たちが審査員を務めるレベルの高いコンクールで演奏することは、私の人生において最大の挑戦でした。ワルシャワのフィルハーモニーホールはとても美しく、エキサイティングな雰囲気に満ちていました。聴衆は新しいピアニストを発見すること、そして彼らが遺伝子レベルで理解しているショパンの音楽をそれぞれのピアニストたちがどのように演奏するか興味津々の様子でした。

この年のコンクールは、いくつかの点で特別なものでした。まず、149人という前例のないコンテスタントの数に加え、予選から本選まで4ラウンドもあったため、コンクールは延々と続きました。私の記憶では、確か1ヵ月続いたと思います。今では、信じられません。

また、ちょうどこの頃、ポーランドにおける民主化運動において主導的役割を担った労働組合「連帯」が結成されたこともあり、コンクール中は政治的な意味で非常に緊張感が高まっていました。ポーランドの民衆は共産主義に反対し、民主化を求めていたため、コンクールではロシア人への風当たりの強さを感じました。

▲ チャイコフスキーホールにて

▲ 師であるヴェラ・ゴルノスタエヴァ氏(右)と

私自身も共産主義に反対していましたが、ロシア人であったため、それに言及することは危険でできませんでした。さらに、ユーゴスラヴィアのイーヴォ・ポゴレリチが本選へ進めなかったことに抗議し、アルゲリッチが審査員を降りてしまうという有名な事件もありました。

―― これまでに師事された先生で印象深い方は？ また尊敬する音楽家はいらっしゃいますか？

チュコフスカヤ　師事した全員が素晴らしい人格者であり、それぞれの異なった音楽の捉え方や解釈にふれることができたことは、とても幸運でした。ヴェラ・ゴルノスタエヴァ、スタニスラフ・ネイガウス、ドミトリー・バシキーロフ、テオドール・レヴィン…皆が、音楽の新しい世界を私の中に開いてくれたのです。私はまた、ロシアの作曲家ミハイル・コロンタイに強い影響を受けました。≪7つのロマンティック・バラード≫などの彼の作品を録音したことで、現代音楽をどう解明し、どう楽しむかを知ることができました。現代音楽が私にとって必要なものとなったのです。

多彩なレパートリーを持つことのメリット

―― 先生は世界各地でソロ・リサイタルやオーケストラとの共演をされていますが、忘れられない演奏会、また一緒に仕事をした指揮者や演奏家で思い出に残っている方は？

チュコフスカヤ　ある演奏会で、こんなことがありました。私はリストのピアノ協奏曲第2番を演奏するはずでした。しかし何かの手違いから、リハーサルでオーケストラが第1番の協奏曲を演奏し始めたのです。しかも彼らは第2番のスコアを持っていませんでした。翌日がコンサートなのに、私は第1番を演奏したことがない…。最終的に何を演奏したか？それは、ショスタコーヴィチの協奏曲第1番でした。

また、かつて私はサンクトペテルブルクで日本の指揮者 小松一彦氏とシューマンの協奏曲を協演したことがあります。彼の第2楽章における表現とテンポ・ルバートは、驚くべきものでした。私は彼の提案通りに演奏し、それはとても素晴らしい体験となりました！ 今でも私はこの協奏曲を弾くたび、彼を思い出します。

―― 演奏家として、演奏する際に心がけていることはありますか？

チュコフスカヤ　演奏者は、様々な側面から作品を捉えながら演奏に集中する必要があります。何より重要なのは、細部まで注意を払うと同時に、全体を大きな映像として捉える能力を持つということ。信念とスタイル、そして強い信仰とエネルギーを持ち、演奏表現することに集中すべきだと思います。

▲ 指揮者&ピアニストのマキシム・ショスタコーヴィチ氏(中央)とチュコフスカヤ先生(左端)

―― 先生は非常に幅広いレパートリーをお持ちですが、どのような思いからレパートリーを開拓されたのでしょうか？

チュコフスカヤ　毎年1つの協奏曲を学ぶよう指導してくれた先生のおかげで、フィルハーモニーのソリストとして活動を始めたとき、私は既に協奏曲のレパートリーを充分に持っていました。これは重要なことです。多くの場合、オーケストラは特定の協奏曲のソリストを探しているからです。協奏曲のレパートリーの数が多いほど、演奏に招待される可能性が高くなります。

―― ご自身の長い音楽活動を振り返って、どのような感想をお持ちですか？

▲ 右から若き日のチュコフスカヤ先生
師であるドミトリー・バシキーロフ氏
ピアニストのダン・タイ・ソン氏

▲ 旧ソ連のピアニスト、レフ・ナウモフ氏(右から2番目)とチュコフスカヤ先生(右端)

▲ 現代音楽の作曲家、ミハイル・コロンタイ氏と

チュコフスカヤ　絶えず進化しようとする欲望とエネルギーを持っているという事が、私の長所であると思います。また、様々なスタイルの新しい作品を素早く学べるという能力も、私のキャリア形成に大いに役立ってきました。

美しい魂を持った若者たち

── 最近のロシア国内の音楽事情について、先生のご意見をお聞かせください。

チュコフスカヤ　まず、ロシアのユニークな音楽教育についてお話しする必要があります。それは、子供の音楽学校、学校、音楽専門学校と3段階になった旧ソ連時代からの教育システムです。近代化が進むにつれ、このシステムを壊そうとする試みがたくさんありましたが、音楽家たちは存続を支持しました。ペレストロイカで、役人がモスクワの中央音楽学校等を閉鎖しようとした際にも、音楽家たちは立ち上がり、それを阻止しました。

現在、演奏会に関しては活況を呈しているといえます。定期的に多くの音楽祭がロシア全域で開催されており、モスクワ、サンクトペテルブルクなどの大都市だけでなく、各州で大きな祭典があります。さらに、多くの良いホールが続々と建設されています。モスクワの最も新しいザリャジエ・コンサートホールは、本当に素晴らしいホールです。

▲ モスクワ音楽院のラフマニノフホールにて

問題点としては、他の国と同様に音楽が商業化されていること。クラシック音楽も“商品化”されています。フィルハーモニーは専属のソリストを置かず、いわゆる“スター”と契約しています。若く無名の音楽家では、音楽家として優れていても、リスナーを集客しづらいというわけです。

── 教育者として指導する上で常に心がけていること、大切にしていることは何でしょう。

チュコフスカヤ　教師は学生に対して大きな責任感を持つべきだと思います。教師は単に専門技能の訓練だけでなく、学生に物事の正しい視点、共通の文化、音楽に対する誠実な態度を示唆するべきです。彼らのパーソナリティーを目覚めさせなければなりません。優れたプロフェッショナルのピアニストになるだけでなく、人生と芸術に関する幅広い視点を持って深く音楽を理解する人、文化人になるためのツールを与えるべきだと考えます。

── 武蔵野の学生たちを指導しての第一印象は？ 他の国の学生と比べて、いかがでしょう。

チュコフスカヤ　美しい魂を持った若者たちである彼らを教えることは、喜びでした。一人ひとり全く異なっていますが、非常に音楽的で知的です。皆、私の提案の全てに反応が良く、演奏する際には、細部にまで非常に細やかに気を配っていました。そして、私がとても感動したこと。それは学生たちが、教師の発言を忘れないようにきちんと書き留めることです。こんなに勤勉で真面目な学生たちを、私は見たことがありません。

日本のすべてが素晴らしい

── 先生は今回が初来日ということですが、日本の印象は？ 日本での生活をエンジョイされていますか？

チュコフスカヤ　日本は、すべてが素晴らしい！ まず、何より国民の人柄。日本人は非常に丁寧で、誠実で、思いやりの気持ちを持っています。自然に対する畏敬の念にも驚きました。そして人々の持つ創造性を、あらゆる所で感じます。また、どこでも清潔に保っていること、交通機関の円滑さも驚きでした。ここでの生活は魅力的の一言です！

▲ 本学福井直昭副学長と

── 最後に武蔵野の学生たちに向け、練習方法や音楽家として成長していく上で何が大切かアドバイスをお願いします。

チュコフスカヤ　練習で最も重要なのは、集中と聴覚のコントロール。私たちは、常に自身が作り出す音を聞き、評価すべきです。ただ楽譜の指示に従うだけでなく、それが意味することを理解することが非常に重要です。音楽のテキストは、解き明かすべきパズルのようなもの。それを解明するには、才能だけでなく、一般文化の高い教養、音楽の広範な知識、作曲家への無限の愛、その作曲家の人生や他の作品を勉強したいという意欲なども必要です。

私は様々な表現手段を探求するために、勇気を出すことを学生に希望します。完璧な表現は不可能であることを理解しなければなりませんが、私たちは常に挑戦することが重要で、それはスリリングなプロセスです。大切なのは、理想を持ち、その理想を捨てることなく、いつも芸術に対して正直であることです。

江古田新キャンパス探訪 7

旋律やリズム、楽譜や弦を連想させる空間のエッセンス

「サインデザイン」

（文：福井直昭 副学長）

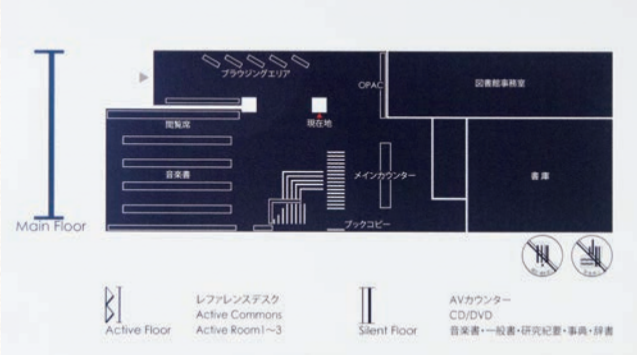
建築用語としての「サイン」とは、建築物に付属する案内板や看板、室内札などの総称です。キャンパスの特性を考慮した新しいこだわりを織り込み、様々な設置環境に調和した、機能的で美しいオリジナルのサインデザインについて、福井直昭副学長がご案内します。

“武蔵野音楽大学らしさ”を表現する多種多様なサイン

サインには、総合案内のように建物の全体像を知らせるとともに現在地との位置関係を示すもの（案内サイン）、目的となる主要な施設へ矢印などによって順路や方向を示し誘導するもの（誘導サイン）、特定の地点や施設の名称を示すもの（位置サイン）、禁止事項を告知したり注意を喚起するもの（規制サイン）など、そのはたらきによっていくつもの種類があります。これら多種多様なサインが空間においてそれぞれ充分に機能するように、表示する意図や目的を勘案し適切に配置して、総合的に組み立てることが重要です。また、それぞれの情報の重要性や優先順位に応じて、文字の大きさや色彩に変化をつけるなどの工夫も必要です。このような配慮の下で江古田キャンパス全体に散りばめられたサインは、“武蔵野音楽大学らしさ”を表す空間のエッセンスとなっています。毎日何気なく目にするサインは、実はキャンパス全体の雰囲気に大きな影響を与えているのです。

◀ リストプラザに設置された位置サイン

▼ リストプラザ大階段に設置されたベートーヴェンホール・ブラームスホールの順路を示す誘導サイン



▲ 図書館メインフロア（1階）に設置されたフロア案内サイン。右下に規制サイン（通話・撮影禁止、飲食禁止）も掲示されている

キャンパスの雰囲気づくりに貢献する「シンプルかつさりげない表現」

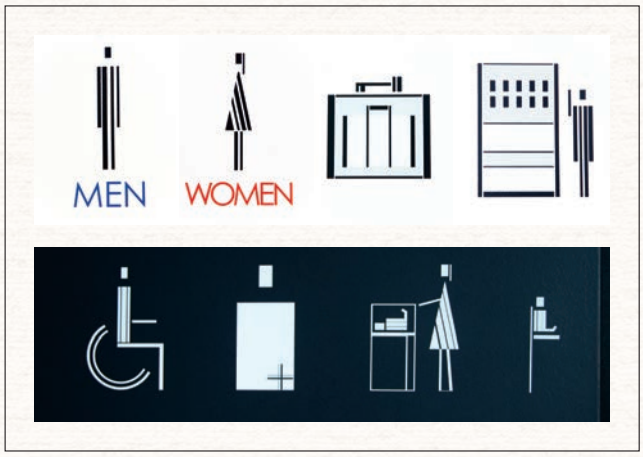
不特定多数が日常的に利用する施設（通常の共用空間）のサインは、「わかりやすく」が大原則です。しかし、江古田キャンパスは、学生や教職員という言わば「特定」多数の大学関係者（Repeater）が主な利用者であることから、「シンプルかつさりげない表現」「空間にリズムを与え、キャンパスの雰囲気づくりに貢献すること」をサインデザインのコンセプトとしました。もちろん、新入生や初めてここを訪れる外部の方々（Beginner）にも対応する、可読性の高い機能的な情報案内の提供も心掛けました。

「強弱のある“線・line”」によるデザインが空間にリズムを与える

前述のコンセプトに沿った上で、音楽大学特有の要素「旋律やリズム」の表現として、「強弱のある“線・line”」によるデザインを展開しました。ラインの太さは音の高低、ライ

▲「強弱のある“線・line”」によるデザインを喚起したイメージ写真。キャンパス内のサイン群は、これらの弦や鍵盤、楽譜に加え、音の高低・密度、旋律やリズムといったものを連想させる

▲「強弱のある“線・line”」によるデザインを背景としてあしらったサイン群。(左)アトリウム手前の自立型総合案内サイン、(右上)エレベーターのフロア案内サイン、(右下)アトリウム内の平置き型総合案内サイン



▲ オリジナルデザインによるピクトグラム(図記号)。
上段左から男女トイレ、ロッカー、自動販売機、下段は多目的トイレ

ンのピッチは音の密度・リズムをイメージし、繊細な表現でそれらを象りました。楽譜や弦をも想起させるこれらのさりげないサイン群により、“武蔵野音楽大学らしさ”を表現しています。写真のように、室番号や階数表示のアラビア・ローマ数字だけでなく、ピクトグラム(図記号)をも、強弱のあるラインで表わしました。さらには、壁面のリブや自立サインの支柱をラインによってデザインしてサインの背景としてあしらい、建築デザインと一体化させ、その結果、キャンパス内が共通のlineモチーフによるオリジナルデザインのサインによって構成されました。

サインの色彩は、建築全体の色合いと同調させかつ視認性を高めるために、深みのあるグレーを基調とし、主張し過ぎないデザインとしています。さらに、ラインに適度な厚みを持たせることによって陰影を生み、建築空間にさりげないエッセンスを与えています。

また、階段の踊り場の表現として、二分休符記号をこっそり混ぜる遊びも有ります。その他、強弱のあるラインによる表現とは別に、透明ガラスの衝突防止サインも、アルファベットによる大学名の頭文字「M・A・M」をモチーフにしたオリジナルデザインです。校名サインは、エントランス周りのほか、武蔵野音楽学園公式エンブレム(シンボルマーク)と共にE棟壁上方に設置されています。ここに取り付けられたエンブレムの色には通常使用されているベーシックな2色の組み合わせ、すなわちメインカラーのパープルとアクセントカラーのレッドではなく、ゴールド(円形部分はシルバー)を使用しており、夜間にはバックライトによって美しく浮かび上がります。

▲ アルファベットによる大学名の頭文字「M・A・M」をモチーフにした透明ガラスの衝突防止サイン

◀ 階段の踊り場を表現した二分休符記号

なお、江古田キャンパスのサイン群は、我が国唯一のサインデザイン顕彰である「第51回日本サインデザイン賞(主催:公益社団法人日本サインデザイン協会)」を受賞いたしました(公共サイン部門)。情報としての機能性はもちろん、造形的な統一感と音楽大学としての個性を表現できるよう細部までこだわった本サイン群は、単なる案内や誘導にとどまらず、教育環境に溶け込み一体化した、空間を構成するのに必要不可欠な要素のひとつを担っています。

▲ アトリウム周りやE棟外壁上方に設置された校名サイン。
E棟のゴールドによる学園エンブレムは、校名サインと共に夜間にはバックライトによって美しく浮かび上がる

たくさんの感動を生んだ演奏会＆公開講座

昨年の9月から12月にかけ、江古田キャンパス内の各ホール、また学外の大規模ホールを舞台に数多くの演奏会・公開講座が実施され、いずれも好評を博しました。

一流演奏者を招いての レクチャー＆コンサート

9月25日には、ドイツを拠点に活躍している中村功氏の打楽器ミニコンサート＆公開レッスンをウィンドアンサンブルホールで開催❶。冒頭のミニコンサートでティンパニの超絶技巧を披露し、歌いながらパンデイロを叩くアドリブでホールはいつしか“功ワールド”の趣に。後半の講座では、手首、体を使ってコンガを叩く独自のリズム訓練を徹底的に指導し、最後はサンバのリズムに乗りながら受講者も一緒に行進し、大いに盛り上がりました。

世界各国でオーケストラとの共演やソロリサイタルも数多く、今回が初来日となる客員教授のイリーナ・チュコフスカヤ教授。そのピアノ・リサイタルが、11月1日にブラームスホールで開かれました❷。前半はモーツァルトとシューベルト、後半はショパンというプログラムを組み、教授ならではの洗練された音色の美しさ、優れた表現力、揺るぎないテクニックで聴衆を唸らせました。

11月16日に行われたのは、世界的オーボエ奏者であり本学ではお馴染みのインゴ・ゴリツキ教授のオーボエ・リサイタル❸。本学の青山聖樹（オーボエ）、岡崎耕治（ファゴット）、岡崎悦子（ピアノ・チェンバロ）の3教授が共演し、美しい調べで聴衆を魅了。教授の人柄がにじみ出た、温かい雰囲気につつまれた演奏会となりました。

12月5日には、ブルガリア出身で世界的に知られるジェニー・ザハリエヴァ女史のピアノ・リサイタルが行われ、ドビュッシー没後100年特別プログラムとして、前奏曲集第1巻と第2巻全曲を演奏。各曲の特質、ドラマ性を的確にとらえ、色彩豊かに表出された音色に、聴衆はドビュッシーの魅力を堪能しました。アンコールには、会場となったブラームスホールにちなみ、ブラームスのピアノ曲集 Op.118より第2番インテルメッツォが披露されました❹。

客席を大いに沸かせた 学生のステージ

11月30日には、東京オペラシティコンサートホールにおいて武蔵野音楽大学管弦楽団合唱団演奏会を開催❺。ワーグナー「《リエンツィ》序曲」で華々しく幕を開けた当日のメインプログラムは、4年ぶりとなるベートーヴェンの「交響曲第9番〈合唱付き〉」。独唱を、学内オーディションで選抜された山口遥輝（Sop.／大学院2年）、杉山由紀（Alt.／大学院修了）、鈴木俊介（Ten.／大学院修了・本学研修員）、井出壮志朗（Bar.／大学院修了）が務め、北原幸男教授指揮による管弦楽団と合唱団の気持ちのこもった熱い演奏に、満員の会場からは大きな拍手が鳴り止みませんでした。

続いて12月7日にベートーヴェンホールで行われたのが、武蔵野音楽大学室内合唱団演奏会❻。指揮を栗山文昭教授、片山みゆき講師が務め、グレ

1

3

5

2

4

6

ゴリオ聖歌、パイプオルガン伴奏によるミサ曲、童謡曲集、合唱組曲と幅広いジャンルの作品を披露。透明感にあふれ、心打つ美しいハーモニーをホール全体に響かせて、詰めかけた聴衆を感動に誘いました。

2018年、国内における演奏会の最後を飾ったのは、12月11日、東京芸術劇場 コンサートホールで開催された武蔵野音楽大学ウィンドアンサンブル演奏会❼。指揮は米国吹奏楽界の重鎮、レイ・E.クレーマー本学名誉教授、ソリストにはニューヨーク・フィルハーモニック首席トランペット奏者のクリストファー・マーティン氏を招聘しました。プログラムは、K.M.ヴァルチック作曲「プロトン」、J.ジルー作曲「《タブー》－独奏トランペットとウィンドアンサンブルのための－」、そしてP.ミーチャン作曲「岸辺に打ち寄せる波」など世界初演を含む多彩なもの。中でも作曲したジルー女史自身が姿を見せた《タブー》では、マーティン氏の柔らかい音色と高度なテクニックが遺憾なく発揮され、聴衆を魅了しました。

その他、学生による演奏会が多数開かれました。11月2日、5日の両日は室内楽演奏会がブラームスホールで行われ、学生たちが日頃の授業の成果を披露しました❽❾。11月14日には、プロの演奏家を育てるための“ヴィルトゥオーゾコース”から選抜された学生による演奏会が、トッパンホールで開催され、それぞれが魅力ある持ち味を存分に聴かせました。そして11月27日には、オペラコースの学生によるオペラ試演会が本学ブラームスホールで行われました❿。モーツァルトの「フィガロの結婚(抜粋)」を上演し、学生のフレッシュな歌声と演技に客席から温かい拍手が送られました。

出演した学生にとって、舞台経験により培われた実践力は、夢を実現させるための大きな力となったことでしょう。

拍手喝采！
本学ウィンドアンサンブル
米国演奏旅行

昨年12月20日、本学のウィンドアンサンブルが、毎年冬に米国シカゴで開催される吹奏楽の世界的イベント「ミッドウェスト・クリニック」に3度目の出演を果たし、その直前に行われた2回のコンサートとともに大好評を博しました。今回の演奏旅行につきましては、次号で詳しくご紹介します。

栄冠おめでとう！(コンクール入賞者等)

(順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)

●旭日重光章受章　小島章司(昭和37年大学声楽専攻卒業)

●プレミエ・オペラ財団国際声楽コンクール2018(アメリカ)　第1位入賞、ドミトリー・ホロストフスキー記念特別賞受賞　大西宇宙(平成20年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)

●第2回ベルリン国際音楽コンクール(ドイツ)　声楽部門　金賞受賞　大西宇宙(平成20年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)

●第20回日本演奏家コンクール　ピアノ部門　一般Aの部　第1位入賞、読売新聞社賞受賞　坂口秀臣(平成29年大学ピアノ専攻卒業、本大学院2年)、●第70回福井県音楽コンクール　弦楽部門　知事賞受賞　青山真梨花(大学3年チェロ専攻)、●第14回ルーマニア国際音楽コンクール　グランプリ受賞、ICon Arts Transylvania賞受賞、打楽器部門　第1位入賞　伊東丈彰(大学3年打楽器専攻)、打楽器部門　第3位入賞　浅井香乃(附属高校2年マリンバ専攻)、●第31回九州・山口ジュニアピアノコンクール　大学の部　最優秀賞、九州・山口音楽協会会長賞受賞　棟近綾奈(平成30年大学ピアノ専攻卒業、本大学院1年)、●第3回ロシア声楽コンクール　プロフェッショナル部門一般　第1位入賞、カワイ賞、日本・ロシア音楽家協会賞受賞　奥秋大樹(平成28年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)、最優秀伴奏者賞、カワイ賞受賞　齋藤誠二(平成21年大学フルート専攻卒業)、●第21回“長江杯”国際音楽コンクール　声楽部門　一般の部A　第1位入賞、中国駐大阪総領事賞受賞　奥秋大樹(平成28年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)、一般の部B　第3位入賞　飯島法子(昭和58年大学声楽専攻卒業)、弦楽器部門　大学の部　第2位入賞(1位なし)　山口雅之(大学4年コントラバス専攻)、●第19回大阪国際音楽コンクール　弦楽器部門ハープ　シニア　第1位入賞、松尾博賞受賞　三谷真珠子(平成29年大学ハープ専攻卒業、本大学院2年)、ピアノ部門　Age-U　第3位入賞　古市明里(平成30年大学ピアノ専攻卒業、本大学院1年、附属高校卒業)、●第26回ヤングアーチストピアノコンクール　ピアノ協奏曲部門　シニアグループ　銀賞受賞(金賞なし)　大島夕季(大学3年ピアノ専攻)、●第22回PIARAピアノコンクール　シニアC部門　第3位入賞　河野　麗(平成30年大学ピアノ専攻卒業)　※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

平成最後の ミューズフェスティヴァル開催

平成最後となるミューズフェスティヴァルが、10月26日～28日の3日間、江古田キャンパスにて盛大に開催されました。テーマは「結～むすび～」。67回目となる今回のミューズフェスティヴァルが、人と人との繋がりを大切にし、時代の転換期に開催されるものの、終わりではなく次代へ繋がるものでありたい、という願いが込められています。

ミューズフェスティヴァルは日頃の研究成果の発表をメインに、お祭りを加えた一大イベントとなっています。前日祭はビッグバンドや仮装オーケストラなどのお祭り要素を全面に出して楽しくにぎやかに、本祭では学生演奏・展示・クラブ同好会など音楽大学らしいレベルの高い研究発表が2日間にわたり繰り広げられました。またリストプラザの模擬店では、出来合いのものではなく、手の込んだ多彩なメニューが並び、行列の絶えない店もあるほど。飲食テントでは学生、教職員、卒業生が和やかに交流し、テーマ「結～むすび～」を象徴するような光景が見受けられました。

3日間を通し、天候に恵まれたこともあり、近隣の方々や卒業生も多くご来場いただいて成功裡に終了することができました。

入間キャンパスでも「音楽の祭典」

10月20日・21日の両日には、入間キャンパスでも附属高等学校・幼稚園・音楽教室主催による入間ミューズフェスティヴァルが開催されました。秋の気配が濃い入間キャンパスで行われるフェスティヴァルも今回が43回目。

附属高等学校では、バッハザールをステージに、ウィンドアンサンブル・合唱、ピアノ・管打弦楽器など授業で培われた成果を存分に発表しました。さらに1年生は縁日「夢灯路(ゆめとうろ)」を2・3年生はアンサンブルコンサートを実施。作曲家＆作品研究・美術・華道の展示、ダンスの発表なども多彩に行われました。

入間キャンパス内の武蔵野幼稚園では、「色」をテーマに各学年が思い思いの世界を作品で表現してホールに展示しました。汽車に導かれて、『森の駅』『遊園地の駅』『色の国』など夢あふれる想像の世界を巡るという趣向。友だちと協力しあった力作を、たくさんのお客様に楽しんでいただきました。

武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金　ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。　学校法人　武蔵野音楽学園

※ご芳名（五十音順）は、平成30年7月1日から10月31日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】 秋山江美様　飯田美樹様　石井百代様　小川靖奏子様　小田ますえ様　筧 美代子様　片桐朝美様　菊地知恵子様　久賀雪子様　坂本慶子様　杉浦桂子様　角南実穂子様　髙堂 暁様　田代珠子様　田辺伸子様　中沢公子様　永富志穂子様　根元 園様　林 秀樹様　原口安代様　許 伯恵様　本宿伶子様　松浦靖子様　宮下悠紀子様　守屋雅恵様　山田はじめ様　吉海江令子様　平成16年度音楽学部入学生および平成18年度編入生 卒業10周年同期会様

【在学生・同ご父母】 穴澤悦子様　石川悦代様　石川弘文様　市川 敬様　小西啓太様　杉山武徳様　田 宗弘様　髙橋敏夫様　滝沢 進様　常世田茂樹様　脇本 靖様

【役員・教職員・一般・他】 上原正子様　佐伯真弥子様　佐藤しのぶ様　関根弘美様　高橋冬彦様　寺本まり子様　永岡信幸様　林 孝治様

（他に匿名を希望される方26名）

2019年度（平成31年度）入学試験日程のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科（博士後期課程）

	出願期間 郵送	出願期間 窓口	試験期間
大学院博士後期課程入試	平成31年2月13日㈬ 消印～20日㈬ 消印	郵送のみ	平成31年3月8日㈮・9日㈯

武蔵野音楽大学（音楽学部）

	出願期間 郵送	出願期間 窓口	試験期間
1年次 一般入試A日程	平成31年1月16日㈬ 消印～30日㈬ 消印	平成31年1月29日㈫・30日㈬	平成31年2月18日㈪～22日㈮
1年次 一般入試B日程	平成31年2月22日㈮ 消印～28日㈭ 必着	平成31年3月1日㈮	平成31年3月5日㈫～7日㈭
1年次 一般入試C日程	平成31年3月7日㈭ 消印～13日㈬ 必着	平成31年3月14日㈭	平成31年3月16日㈯～18日㈪
3年次編・転入学入試	平成31年1月16日㈬ 消印～23日㈬ 消印	郵送のみ	平成31年2月10日㈰・11日㈪㈷

●一般入試A日程およびB・C日程の受験では、国語・外国語（英語・ドイツ語・フランス語）について、大学入試センター試験の成績を利用できます。

入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。

武蔵野音楽大学（別科）

	出願期間 郵送	出願期間 窓口	試験期間
別科入試	平成31年1月16日㈬ 消印～23日㈬ 消印	郵送のみ	平成31年2月11日㈪㈷・12日㈫

武蔵野音楽大学附属高等学校（音楽科）

	出願期間 郵送	出願期間 窓口	試験期間
附属高等学校推薦入試	平成31年1月9日㈬～16日㈬ 必着	郵送のみ	平成31年1月22日㈫ ※入間キャンパスにて実施
附属高等学校一般入試A	平成31年1月23日㈬～30日㈬ 消印	郵送のみ	平成31年2月10日㈰
附属高等学校一般入試B	平成31年3月1日㈮～11日㈪ 必着	郵送のみ	平成31年3月16日㈯

【会　　場】武蔵野音楽大学江古田キャンパス（附属高校推薦入試を除く）

【要 項 請 求】各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。
郵送をご希望の方には無料でお送りいたしますので、本学ウェブサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および希望される入学試験要項の種別（附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科）をお知らせください。

【要項請求先】武蔵野音楽大学 広報室
〒176-8521　東京都練馬区羽沢1-13-1　TEL.03-3992-1125
本学ウェブサイト　http://www.musashino-music.ac.jp/

音楽教室（江古田・入間・多摩）　生徒募集のお知らせ

◆受験可能な年齢・学年（平成31年3月末現在）

プレコース	3歳
スタンダードコース	4歳～高等学校2年生
レッスンコース	小学校6年生～高等学校2年生
ソルフェージュコース	4歳～高等学校2年生
受験コース（大学志望）	中学校3年生～高等学校3年生
エクセレンスコース（江古田音楽教室のみ設置）	5歳～高等学校2年生

【前期入室試験】平成31年2月24日㈰　各音楽教室で実施
※エクセレンスコースは江古田音楽教室で行います。
【願 書 受 付】平成31年2月2日㈯～2月16日㈯　※日曜・月曜・祝日を除く
入室試験の詳細については、2019年度音楽教室のご案内（生徒募集要項）でご確認ください。要項は各音楽教室で取り扱っております。音楽教室ウェブサイトの資料請求フォームからもご請求いただけます（送料無料）。その他詳細については、下記へお問い合わせください。
▮江古田音楽教室　TEL.03-3994-7536　▮入間音楽教室　TEL.04-2932-1111
▮多摩音楽教室　TEL.042-389-0711
音楽教室ウェブサイト http://music_school.musashino-music.ac.jp/

編集後記

2019年が始まりました。本年は5月より元号が改まる節目の年。平成の時代を懐かしみつつ、新たな時代への希望に胸躍らせる激動の年となりそうです。皆さんはこの記念すべき年の幕開けに、どんな目標を描きましたか。意義ある1年とするためにも、不断の努力を怠らず、充実の日々をおくりたいものです。今号の巻頭は、2019年が没後150年にあたるベルリオーズについて、音楽学の稲田先生に原稿をお願いしました（編）。

武蔵野音楽大学楽器ミュージアムだより――

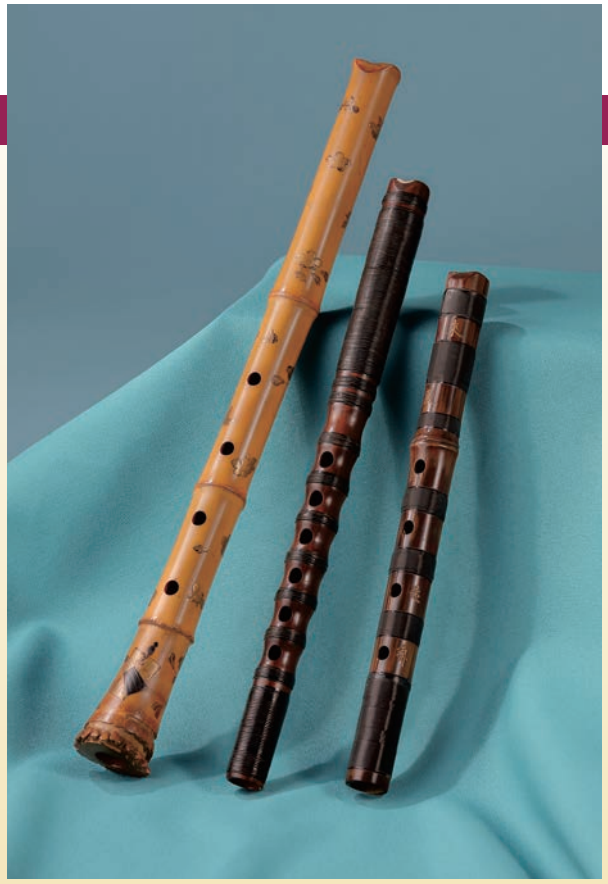
尺八三種 日本

一節切（ひとよぎり） 銘 來鳳 17世紀前半 原是斎（はらぜさい）作 全長33㎝
普化尺八 銘 貫出 製作年・製作者不詳 全長49㎝
七孔尺八 製作年不詳 富山松揚（とみやましょうよう）作 全長40㎝

日本人と竹の関わりの歴史は古い。平安時代の作品『竹取物語』に見られる神秘性や、新年を祝う門松の例からもわかるように、竹は松とともに古来から神の依代になるものと信じられてきた。

一方、節があり、しなやかで軽く加工がしやすいという特徴をもつ竹は、竹工芸や茶道、日本建築など様々な日本文化の中で欠くことのできない存在として重宝され、日本文化を象徴する素材のひとつになっている。竹を用いた楽器も笙・篳篥・笛類など豊富にあるが、中でも尺八は、竹の根に近い部分を管の下端に活かした素朴な形状で、その音色とともに、自然を尊ぶ極めて日本らしい感性から生まれた楽器であると言えよう。

一言で尺八と言っても、歴史的なものを含めるといくつかの種類がある。最も古い古代尺八は唐代の楽器が伝来した6孔のもので、正倉院などに遺例を見ることができる。その後中世になると、一節で5孔の「一節切」が誕生して、貴族や僧侶、武士などに愛好されるようになった。写真右の楽器は、当時名手として知られた原是斎（1580–1669）の作である。今日尺八として広く知られているのは、写真左の「普化尺八」と呼ばれる種類で、名称は江戸時代、主に普化宗の法器として用いられていたことに由来する。楽器の下部には、金蒔絵で雛人形が上品に描かれている。



▲ 写真左から　普化尺八、七孔尺八、一節切

明治時代以降、近代化の波は邦楽界にも大きな影響を及ぼした。西洋音楽の普及とともに、大正から昭和初期には新しい日本音楽が模索され、様々な改良邦楽器が生み出された。写真中央の「七孔尺八」楽器もそのような時代の中で誕生したもので、より均一な半音階をもとめて、普化尺八の指孔を7つに増やした改良楽器である。（武蔵野音楽大学楽器ミュージアム所蔵）

目 次

謹賀新年 …… 1
福井直敬
ベルリオーズ没後150年に寄せて …… 2
稲田隆之
音楽の万華鏡 …… 5
大阪万博　楢崎洋子
海外音楽事情 …… 6
音楽と向き合う姿勢　イリーナ・チュコフスカヤ
江古田新キャンパス探訪⑦ …… 9
サインデザイン
MUSASHINO NEWS …… 11
・たくさんの感動を生んだ演奏会＆公開講座
・拍手喝采！ 本学ウィンドアンサンブル米国演奏旅行
・栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）
・平成最後のミューズフェスティヴァル開催
・武蔵野音楽学園教育運営推進協力寄附金 ご寄附をいただいた方々
・2019年度（平成31年度）入学試験日程のお知らせ
・音楽教室（江古田・入間・多摩）生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程
武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

発 行
学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1 TEL.03-3992-1121（代表）
入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728 TEL.04-2932-2111（代表）
パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1 TEL.042-389-0711（代表）
http://www.musashino-music.ac.jp/

2019年1月10日発行　通巻第128号